

インドゾウに対するエンリッチメントの取り組み

庄子泰之，桐生大輔，先崎優，半澤紗由里，安藤正人，○須藤一行
(横浜市立金沢動物園)

横浜市立金沢動物園では昭和 60(1985)年にインドのボンベイ市よりインドゾウ(*Elephas maximus indicus*) が雌雄 1 頭ずつ寄贈され、今日まで飼育を行っている。2 頭は現在までおおむね健康であるが、常同行動が確認されている。この行動の削減のために、これまでいくつかのエンリッチメントに取り組んできた。本報告では、これまでの取り組みを、遊具系、給餌器系、床材系の 3 つに分類した。遊具系は大小の丸太やタイヤ、雪などを設置した。どれも設置後数日間にはよく利用したが、それ以降は徐々に利用頻度が下がっていった。また、破損も多く、同じものを長期間運用することはできなかった。給餌器系は餌が入った容器などをゾウが触り、動かすことでエサが排出される能動的なものと、予め設定した時間にエサが排出される受動的な物の 2 パターンを用いた。どちらもよく利用し、採食にかかる時間と運動量を増加させることができた。床材系の物はウッドチップや黒土、山砂などを用いた。ウッドチップは、冬季にプールの中に、水を張る代わりに導入した。チップを体にかけるなどしてよく利用していたが、導入後にチップを大量に食べたことが原因と思われる疝痛が発生したため撤去した。砂は数キロ程度を展示場に導入することから始め、徐々に増加させた。現在は 33 トンを導入している。当園は展示場の床がコンクリートであり砂浴びができない環境であったため、導入直後から現在まで砂浴びに非常によく利用されている。その他の取り組みとして、夜間に寝室と展示場に行き来を自由にさせ、利用可能な空間を増やすことで行動の選択肢を増やす取り組みも行っている。これらの取り組みによりエンリッチメント実施前と比べて、常同行動が減少していることが大学との共同調査で示唆された。